

『特別寄稿』

薩摩士風

古藤田 太

(会員 弥生町江良)

一、序

「佐伯史談」は素晴らしい史談会であると平素考え、会員の一人であることを誇りとしている。然し次のようなささやかな所信を持っている。「佐伯史談」の中に物語り風というか、誰でも読んで楽しめるものを多く採り入れるように心懸けることも読者を広げる意味から必要であろうかと考える。

そう言う私の「薩摩士風」とはむつかしい響があるが、もう二十年前に小野英治氏、五十川千代見氏と鹿児島県下の田舎を走っていると、とある小学校の近くの道端に標語がペンキ書で建ててあった。「負けるな」ただ書いて建ててある。又一つ「嘘を言うな」暫らく行くと「弱い子をいじめるな」とあった。私はこの簡潔に

して要を得た標語は素晴らしいと思った。千万言を費やす教訓もこの標語に及ばないと考えた。こういう標語の世界に育った子供が薩摩武士となったのであった。現代、日本は各方面とも危機に直面している。日本人は大切な何かを完全に忘れ去っているのではあるまいか。

二、耳川の戦い

戦国期の戦乱もやがて統一へと向って動く十五世紀後半、九州統一を夢みる大友宗麟と、南九州を制圧して北上せんとする島津義久は、日向小丸川から耳川辺りの間で雌雄を決することとなった戦が、天正六年の耳川の戦と呼ばれるものである。大友宗麟はキリスト教を信仰し、日向に新天地「日向天国」を夢みる戦いであった。しかし、現実には天国どころか大友氏終焉の契期ともなる大敗に終わった大戦であった。

この耳川敗戦の理由は幾つか挙げられる。

(一)は高城という所に在る小城、高城城は名将山田信介有信が守る城で手兵五〇〇と言われる程の小城であった。大友軍は四万と称する大軍を以てこの小城を昼夜を分たず攻め立て、豊後から国崩しと呼ばれる巨砲を曳いて

行つたが役に立たず、遂にこの城を落とせなかつた。

(二)は大友軍の大將田原親賢(紹忍)が、最初から鳥津との戦に反対した南部衆の一人田北鎮周を故意に先陣の大將としたこと。このため田北は戦死を覚悟し、無理に小丸川を渡河して鳥津軍に強行突入し、大友軍が算を乱す契期をつくつた。

(三)は多数強力な南部衆は敵の後方を突くという宇廻作戦を採ることになつていながら、一カ所に殆んど停滞してこの大戦に参加しなかつた。

(四)はキリスト教を信奉する大友宗麟には多くの士族配下は心従しなかつた。

大友軍四万が二万になつたとさえ言われる耳川敗戦から大友の勢威は急速に墜ち、僅か十五年後には豊後から消え去るのである。この耳川戦の序章である高城戦の最中、城將山田有信には「男子出産」の吉報が届けられ、城兵は一斉に快哉を叫んだのである。この児こそ父に劣らぬ名將となつた山田有栄ありさかで、得度して昌巖と称し名地頭となつた人である。

三、高城の戦と山田有信

秀吉は、家康入洛の問題が解決すると、天正十四年十二月には九州遠征軍の編成を三十七カ国から兵を集めて行つた。動員兵力は二十五万と称し、馬は二万頭に及んだ。

天正十五年三月一日には秀吉自身、佐々成政を従えて大坂を出発した。小倉に於いて兵を二つに分け、日向路を進む羽柴秀長は府内を経て日向に入り、四月六日豊薩戦の時と同様、高城城を大兵を以て包囲した。高城救援の義弘・家久等の軍と義久の大軍は、羽柴秀長の大軍と根白坂に戦い敗れて、薩摩隼人の勇をもつてもどうにもならぬ大敵と覺り、秀吉に降伏することになつたが、高城では山田有信が大敵を恐れず抗戦していた。

一方、秀吉は諸敵を降しながら出水いづみに上陸して鳥津忠永を降し、川内川せがひをのぼり泰平寺に本宮を置いた。

鳥津義久は秀長に伊集院忠棟を人質にし、降服を申し入れ鹿兒島に帰陣した。秀吉は秀長に鳥津義久が降伏した旨の連絡により進軍を止めた。義久は尚抗戦を続ける山田有信を説得したが、仲々従わず抗戦の態勢を崩さなかつたので再三急使を立て開城をすすめたが聴き入れず、義久はついに親戚に當る町田久之を使者にたて、

「開城せよ」と嚴命を伝えてようやく開城したのである。

義久は剃髪し、墨染の衣をまとい竜伯と号して謹慎していたが、五月八日泰平寺に赴き秀吉に降伏した。秀吉は義久が娘亀寿を人質として差出し、義久の在京を条件に罪を許し、弟義弘には大隅を、義弘の子久保に日向の一部を与えることを認めた。

秀吉の島津に対する処分は非常に寛大であったと考えられる。

高城の開城ということになって、山田有信は羽柴秀長に、開城ということは戦に敗れたことである。開城の条件はどのようなことであるかとたずねると、「御子息千代太郎（有栄のこと）を当方で御あずかり申そう。お誓いに異心なくば御異存あるまい」と。千代太郎出産後、産後の肥立ち悪く妻を亡くし、有信は、千代太郎を手離すことに内心抵抗を覚えたが、人質として秀長に渡したのである。秀長は千代太郎を一目見るなりその非凡さを知り、近侍の武士達に「城はまことの人の得なければ必ず落ちるものだ。高城が落ちなかつた理がこれで解つた」と言つたと伝えられる。

秀長は有信に「有信殿はよく善戦された。有信殿に肥後天草四万三千石の地をお贈り申そう、御受け取り下さるだろうな。」有信は自分に大碌を下さるということが解ると「折角なれど御断り申そう。島津を離れての奉公はきつぱり御断り申す」と堅く辞退した。この話は山田有信の人物像をよく伝えるものであろう。

高城から遠からぬ所に、俗に宗麒原と呼ぶ広い畑地がある。それは、高城戦の大友・島津の決戦場となつた所である。浮足立つた大友軍はここで実に多くの武士が討たれた。勿論島津方の戦死者も多かつたに違いない。ここに両軍のおびただしい戦死者を弔う石幢が建てられていた。

私が最初ここを訪ねた昭和四二年当時は、既に石幢の笠も無く、塔身は参拝者が抉りとつた穴ばかりで空き間も無い程で悲惨な姿であつた。考えてみるとその昔、戦死者の遠く近くの身内の参拝者が陸続と続き、せめて形見として抉り取つた石粉を持ち帰つて祭つたものか牛馬に与えたものであろう。今は堂々たる重制石幢が建てられ国の指定史蹟として、天正六年の大友・島津の決戦は如何なるものであつたかを多くの参拝者に語り続けている。

る。

この石幢こそ、名将山田民部少輔有信が自費をもつて敵味方の戦死者を弔うために建てたものであった。

有信は六十才を以て亡くなり国分の竜昌寺に葬られたが、平素有信の人なりに敬服していた島津義弘は、わざわざ樞を隼人城の橋近くに迎え、みずから焼香し歌一首を供えた。

はずの葉におきこぼしたる露の玉

おわりや君がために捨てけん

四、山田有栄の渡鮮

千代太郎は十四才で元服し、山田有栄ありなとなつて島津義弘の配下として朝鮮役に出征した。ここでは島津軍の一部の戦果を語るに止めたい。

文禄の役で秀吉が島津氏に課した軍役は兵一万五千名、鉄砲千五百挺で島津にとつては苛酷なものであった。そのため調達がおくられて義弘の釜山到着は、諸將に数日遅れてしまった。義弘の配下出水城主島津忠辰なかつちは更に遅ること数日であったばかりか、義弘の命に背き進

軍しなかつた。

これを知つた秀吉は陣中の忠辰を捕え小西陣営に監禁したが、やがて陣没した。出水五万三千石は天領となり、唐津城主高橋新蔵が出水城主に着任した。

慶長の役も三年七月頃になると秀吉の重病説が各戦陣に流れるようになったが、八月十八日秀吉が死去し、遺言に依り日本軍の撤退命令が発せられた。

この事態に気づいた朝鮮連合軍は日本軍の撤退を妨害しようとした。

加藤清正の蔚山城の包圍攻撃前後から、泗川しせんの島津軍を大挙して攻撃にかかった。守将島津義弘は奇策を以て敵をひきつけておき、ドット激しい銃火と特有の白刃攻撃で反撃ものすごく、無数の敵を圧倒して晋州川に追いこみ溺死する者数知れず、死者八万と呼ぶるほどの勝利を得た。所謂「泗川の大勝」であった。

また、名将李舜臣は全水軍を動員して日本軍の帰路を要撃せんとし、巨濟島あたりで島津義弘の乗船群と戦となり、大混戦のさ中、義弘の所在を示す馬印を奪われ、懸命に漕ぎ去るのを見た島津軍の兵は、忽ち海中に身を躍らして敵船に上ると、身に数創を受けつつも馬印を奪

還して無事帰船する一幕があり、敵も味方も船べりを叩いて賞讃したという。

このような日本軍撤退を要撃せんとして起こった海戦で、名将李舜臣が日本軍の銃弾で戦死して以来、比較的平安な撤退が可能となったのである。

島津軍はつねに敵を圧倒し、「シマズ」の勇名をとどろかした中であつて、山田有栄も幾多の戦功を挙げ、慶長三年冬島津忠恒（後の家久）に従つて帰国したが、朝鮮役の功により二十才にして福山地頭を拝命した。

（天領にされた出水五万三千石も泗川の功により、また島津領として還つたのである。）

福山地頭たること三十余年、得度して昌巖しょうがんと号し、入領民に名地頭として慕われたが、寛永六年二月突如出水地頭を命ぜられたのである。有栄は文武両道にすぐれ、外見を飾らず質素健実であつたという。

出水地頭に赴任するや、地元の青年達は名地頭を試さんとして、こしらえた大蛙の吸物をうまそうに喰ひ、御返しにキラキラ光る釘を沈めた吸物を出した話を「灯」に出したことがある。

有栄は任地に落ちつくこと二年にして関ヶ原戦に出征

することになった。

五、関ヶ原戦敗退行

慶長五年九月、天下の覇権が豊臣氏から徳川氏に移るかどうかが、世情が緊迫してくると薩摩の国許では、「主君の一大事」とばかり義を重んずる中務豊久始め、長寿院盛淳、大田吉兵衛等が多いもので五十騎・三十騎、少ない者で二、三騎・単騎の武士もあつたが、我もわれもと駆けのぼるのであつた。

山田有栄も指宿清左衛門、黒木左近兵衛、荒田助三郎等合せて三十二騎の有栄一行は、昼夜の別なく馳せ参じて九月十三日、大垣の島津の陣所に到着した。

九月十五日の関ヶ原の状況は西軍八万五千、東軍は十萬四千とやや上回つた。然し、布陣の情態は西軍有利と目されていたという。正午頃までは一進一退の状態であつたが、午後二時頃、松尾山の小早川秀秋が東軍の銃声で決断を迫られ、裏切りを決意して山を降り大谷吉継の陣地に突入したのを契機に東軍攻勢に転じた。午後二時には東軍の勝利が明確になつた。

西軍総崩れの中に、島津軍は家康の本陣陣場野を強行

突破して血路を開き戦場脱出を図った。敗者の痛みは常に大きい。総大将義弘を敵に討たせてはならないとは全将士の思いである。追撃して来る敵に島津の将兵は踏みとどまって立ち向い犠牲になってゆく。どれ程の武者が散華したことか。

義弘を囲む本隊は一路南に切り抜けて走る。島津坂では家久の嫡子豊久が、粟原山では重臣阿多長寿院盛淳が義弘の危急を救うて相果てた。多くの武士の阿修羅の如き奮戦と犠牲によって島津軍は東軍十萬の囲みを脱し得たが、義弘側近の武者はわずか數十騎となって強行軍が続いた。

九月十七日の未明、とある村落で初めて休息をとった。辛じて農家より玄米一俵を手に入れ、その仄炊いて腹を満たしたが、元より米代のあるう筈もなく、義弘が辞を低くしてわびを入れている時、フトこの有様を見た山田有栄は、日頃同僚に笑われながらも危急の場合に持っていた黄金づくりの刀を米代にと差し出した。これを見た義弘は、自分は良き家来を持っている、と深く打たれた様子であったという。

その後も犠牲を伴う辛苦の撤退行は続き、義弘が自刃

せんとする場面は一、二回にとどまらなかつた。苦勞して大坂に出て、大坂商人棚辺屋道興らの活躍により船を仕立て帰途についたが、穏やかな船旅ではなかつた。

この関ヶ原苦心の敗退行はたちまち領内に伝わり、「関ヶ原を忘るるな」の合言葉となつて、何時の頃からか多数の領民は九月十五日（関ヶ原戦に敗れた日）の夜明けから午後にかけて思い思いの服装で、ラツパを先頭に義弘の菩提寺である妙円寺に歌をうたいながら行進が続く。この妙円寺詣りの行事は年毎に盛大となり薩摩の三大行事となつた。勿論若い西郷も大久保も妙円寺詣りの歌を歌つて行進したのである。

島津義弘は第十七代藩主で、豪勇で知られた武将であつたが人徳高く、産業を興し民福をはかり、常に民と苦楽を共にされた藩主であつた。晩年は加治木に余生を送り、関ヶ原戦より十九年後八十五才で逝去された。義弘の死を知るや十三名の殉死者が続いたことでも薩摩士風が如何なるものか。山田有栄、有栄を例に薩摩士風を語ろうとしたが、稚拙な筆で意を尽くせなかつたことをおわびして擱筆